



PRESS RELEASE



2024.3.5

日本語版



Photo by Keizo Kioku

## 現代美術が観測した、個人と社会の距離感

リモートでつながる利便性に隠された現実や世界観のゆらぎ  
コロナ禍中に構想された、デジタル社会を映し出すグループ展

国立新美術館は、2024年3月6日(水)から6月3日(月)まで、当館では5年ぶりとなる現代美術のグループ展「遠距離現在 Universal / Remote」を開催します。

20世紀後半以降、人、資本、情報の移動は世界規模に広がりました。2010年代から本格化したスマートデバイスの普及とともに、オーバーツーリズム、生産コストと環境負担の途上国への転嫁、情報格差など、グローバルな移動に伴う問題を抱えたまま、私たちは2020年代を迎えました。そして、2020年に始まった国境のないパンデミックにより、人の移動が不意に停止されたものの、資本と情報の移動が止まる気配はありませんでした。かえって、資本や情報の本当の姿が見えてくるようになったと思えます。豊かさと貧しさ。強さと弱さ。私たちの世界のいびつな姿はますます露骨に、あらわになるようです。

展覧会タイトル「遠距離現在 Universal / Remote」は、資本と情報が世界規模で移動する今世紀の状況を踏まえたものです。監視システムの過剰や精密なテクノロジーのもたらす滑稽さ、また人間の深い孤独を感じさせる作品群は、今の時代、あるいはポストコロナ時代の世界と真摯に向き合っているようにも見えます。本展は、「Pan- の規模で拡大し続ける社会」と「リモート化する個人」の2つを軸に、このような社会的条件が形成されてきた今世紀の社会の在り方に取り組んできた8名と1組の作品をご紹介します。

アジア、欧米、北欧など国際的に活躍しているアーティストたちの作品を通じて、ポストパンデミック社会と個人の在り方を鑑賞者とともに読み解きます。

## 出展アーティスト

\*本展企画構成順

井田大介 | Daisuke Ida

徐冰 (シュ・ビン) | Xu Bing

トレヴァー・パグレン | Trevor Paglen

ヒト・シュタイエル | Hito Steyerl

ジョルジ・ガゴ・ガゴシツェ | Giorgi Gago Gagoshidze

ミロス・トラキロヴィチ | Miloš Trakilović

地主麻衣子 | Maiko Jinushi

ティナ・エングホフ | Tina Enghoff

チャ・ジェミン | Jeamin Cha

エヴァン・ロス | Evan Roth

木浦奈津子 | Natsuko Kiura

## キュレーター

尹志慧 | Jihye Yun

国立新美術館 特定研究員。国立国際美術館 (2015-19年)、芦屋市立美術博物館 (2020-21年) を経て現職。「遠距離現在 Universal / Remote」展 (2023-24年、熊本市現代美術館、国立新美術館、広島市現代美術館) を企画。携わった展覧会に、「国立新美術館開館 15周年記念 李禹煥」(2022年、国立新美術館)、「芦屋の時間 大コレクション展」(2020年、芦屋市立美術博物館)、「クリスチャン・ボルタンスキー - Lifetime」(2019年、国立国際美術館) など。

## 展覧会タイトル について

本展は、日に日に忘却の彼方へ遠ざかる、ほんの少し前の3年間のパンデミックの時期を、現代美術を通して振り返る展覧会である。

今の時代を生きる私たちにとって、「遠さ」を感じることは、困難である。だが、その地理的な「遠さ」は決して打ち消すことはできない。コロナ禍では2メートルという距離が設定されたが、それは「飛沫が届かない遠さ」を確保するためだった。あるいは、入国制限や渡航禁止によって、国家間の「遠さ」が露呈した。停滞した物流は、地球に住む私たちに「遠さ」の認識を改めて突きつけた。ふだんは見えなかっただけ、意識にのぼらなかつただけで、もともと「遠かった」ことをこのパンデミックの時に認識したのだった。リモートワークの定着によって「遠さ」を隠蔽、解消することに成功はしたし、コロナが沈静化すると、早くも「遠さ」の感覚を我々は忘れてしまった。

タイトル「遠距離現在 Universal / Remote」は、常に遠くあり続ける現在を忘れないために造語された。本来は万能リモコンを意味する Universal Remote を、スラッシュで分断することで、その「万能性」にくさびを打ち、ユニバーサル(世界)とリモート(遠隔、非対面)を露呈させる。コロナ禍を経て私たちが認識した「遠さ」の感覚、また、今なお遠くにそれぞれが生きていることを認識するのは重要なのではないかという思いが、この題名に込められている。

## 本展のポイント パンデミックに対する現代美術からの応答

世界的な緊急事態であった新型コロナウイルス感染症というパンデミックが始まった2020年からの約「3年間」が私たちにとってどのような時期だったのか。社会はいかにして今の姿に至ったのか。今後の私たちはどこに向かうべきか。ポストパンデミック社会と個人の在り方を現代美術で考察します。

### グローバル資本主義社会で暮らす私たちを映し出す

本展は、「Pan-」の規模で拡大し続ける社会と「リモート化する個人」の2つの軸で構成されます。「Pan-」と「リモート」は、かけ離れているように見えますが、対立概念ではなくそれぞれがお互いを映し出す合わせ鏡のような存在です。本展覧会は、全世界規模の「Pan-」と、非対面の遠隔操作「リモート」の2つの視点から、グローバル資本主義や社会のデジタル化といった現代美術における従来のテーマを新たに捉えなおします。

### 「3年間」を経験した「現在」の鑑賞者とともに読み解く

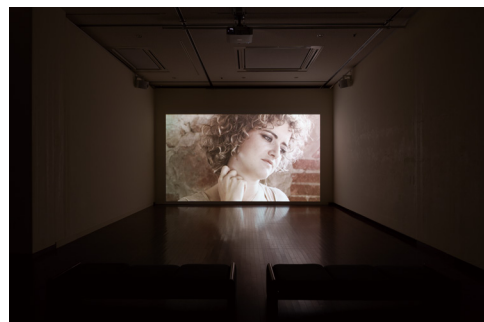
本展出品作品の多くは2019年までに制作されたものであり、コロナ禍の日々の中で生まれた作品ではありません。現在の私たちは、作品が発表された当時、すなわちコロナ禍を経験する前と同じようにこれらの作品をみることはできるでしょうか。過剰な監視システムや精密なテクノロジーのもたらす滑稽さ、その中で生きる人間の深い孤独を感じさせる作品群は、今の時代、またポストコロナ時代の世界と真摯に向き合うものです。

### 世界が注目する国際的なアーティストたちの作品を展示

本展では、海外を拠点に活動する作家の作品が多く出展されます。ニューヨークと北京を拠点として世界的に活躍する現代美術の巨匠、徐冰(シュ・ビン)による初の映像作品をはじめ、2010年代より現代美術の動向をリードしているヒト・シュタイエル(ジョルジ・ガゴ・ガゴシツェ、ミロス・トラキロヴィチとの共同制作)、最先端の科学技術と現代美術を融合するトレヴァー・パグレン、多様なメディアにおける芸術制作にハッカーの哲学を応用するエヴァン・ロスによる作品を、国立新美術館の展示空間に展開します。フォト・ジャーナリズムとアート・アクティヴィズムの領域を横断するデンマークの写真家ティナ・エングホフ、韓国の新進気鋭の映像作家チャ・ジェミンは本邦初紹介となります。また本展の2つのキーワードをまたがる地主麻衣子の映像作品、本展のために作品を再構成した井田大介、そして木浦奈津子の新作群を展覧します。



ジョルジ・ガゴ・ガゴシツェ、ヒト・シュタイエル、ミロス・トラキロヴィチ  
《ミッション完了：ペランシー》2019年  
「遠距離現在 Universal / Remote」 熊本市現代美術館 2023年 展示風景  
Photo by Shintaro Yamanaka (Qsyum!)



地主麻衣子《遠いデュエット》2016年  
「遠距離現在 Universal / Remote」 熊本市現代美術館 2023年 展示風景  
Photo by Shintaro Yamanaka (Qsyum!)

## 展示構成

### 「Pan-」の規模で拡大し続ける社会

感染を防ぎ、人流を抑制するための国家権力の強化と監視システムの容認という問題は、それなりの成果を上げながらも、同時にポストコロナ社会の大きな課題として残りました。人々はかつて経験しなかったほどに、国家の力と国民の自由のバランス感覚を試されているとも言えます。しかし資本と情報の移動は、それと関係なく加速を続け、人々を煽り続けるでしょう。近年のデジタル通貨導入の動きや、ブロックチェーンを基盤とするNFT(非代替性トークン)経済の過熱もまた、遠隔でも社会が機能し、拡大し続けるための仕組みでもあります。このような資本と情報の問題意識に着眼した作品として、井田大介、徐冰、トレヴァー・パグレン、ヒト・シュタイエル(ジョルジ・ガゴ・ガゴシツェ、ミロス・トラキロヴィチとの共同制作)、地主麻衣子を取りあげます。



徐冰《とんぼの眼》2017年  
「遠距離現在 Universal / Remote」 熊本市現代美術館 2023年 展示風景  
Photo by Shintaro Yamanaka (Qsyumi)

### 「リモート」化する個人

コロナ禍の間もこのグローバル社会は世界規模で拡大を続けます。しかし不思議なことに、逆説的に、個人のリモート化は進行してしまいます。オンラインで個人と個人が結びつき、家を出ずして国境をまたぐことは、もはや当たり前のことになっています。コロナ禍がリモート化を加速させましたが、今後一層、ますます地理的な距離感は消滅していくでしょう。縁もない、実際に見ることも訪れることもない世界へ向けて黙々と労働する姿は、どこか孤独で、底抜けの寂しさを感じさせます。それは、人間の心に大きな影響を与えるのではないのでしょうか。「非接触」を前提に「遠隔化」される個人の働き方と居住についてティナ・エングホフ、チャ・ジェミン、エヴァン・ロス、木浦奈津子の作品を通して考えます。地主麻衣子の作品はこの2つのテーマを横断するものでもあります。



エヴァン・ロス《あなたが生まれてから》2023年  
「遠距離現在 Universal / Remote」 熊本市現代美術館 2023年 展示風景  
Photo by Shintaro Yamanaka (Qsyumi)

出展作家・作品

現代社会に生きる人々の不安や欲望を  
メタファーを通して「彫刻」した映像作品

井田大介 Daisuke Ida

1987年鳥取県生まれ、東京都在住。2015年に東京藝術大学大学院美術研究科(彫刻専攻)を、2016年にMADアートプラクティクスを修了。近年の主な個展に「SYNOPTES」(Tezukayama Gallery、大阪、2023年)「あなたが鳴らしても鐘は止まない」(デカメロン、東京、2021-22年)、「Photo Sculpture」(3331 Arts Chiyoda、2018年)など。東京ビエンナーレ(2021年)や「日本国憲法典(part 2)」(青山目黒、東京、2023年)などの芸術祭やグループ展にも参加している。主な受賞歴に第19回岡本太郎現代芸術賞入賞(2016年)など。



《誰が為に鐘は鳴る》

井田は彫刻という表現形式を問いながら、目には見えない現代の社会の構造や、そこで生きる人々の意識や欲望を彫刻・映像・3DCGなど多様なメディアを用いて視覚化している。2021年に制作された3点の映像作品《誰が為に鐘は鳴る》、《イカロス》、《Fever》が、本展のための3部作として再構成される。いずれの作品でも「炎」が重要な要素となっており、熱がもたらす上昇気流やSNSの炎上などから「飛行」「上昇」「落下」のメタファーでコロナ禍社会を可視化する。



井田大介《誰が為に鐘は鳴る》2021年  
ビデオ(ループ再生)  
作家蔵  
©Daisuke Ida  
Courtesy of the Artist

出展作家・作品

国際的に高い評価を得ている現代美術の巨匠による初の映像作品  
監視カメラが映す現実から壮大な虚構を生む

徐冰(シュ・ビン) Xu Bing

1955年中国、重慶生まれ。北京とNYを拠点に活動。1987年に北京の中央美術学院版画専攻の修士課程を修了。近年の主な個展に「Xu Bing: Gravitational Arena」(浦東美術館、上海、2022-24年)、「Xu One: Xu Bing」(ブルックリン美術館、2019-20年)など。2015年にアメリカ国務省芸術勲章を受章したほか、第14回福岡アジア文化賞(2003年)などを受賞している。実在しない「偽漢字」や漢字のように見える英文「新英文書法」の創作、絵文字と記号のみで書かれた小説「地書」、廃材を用いたインスタレーション作品などで知られている。



Xu Bing Studio

《とんぼの眼》

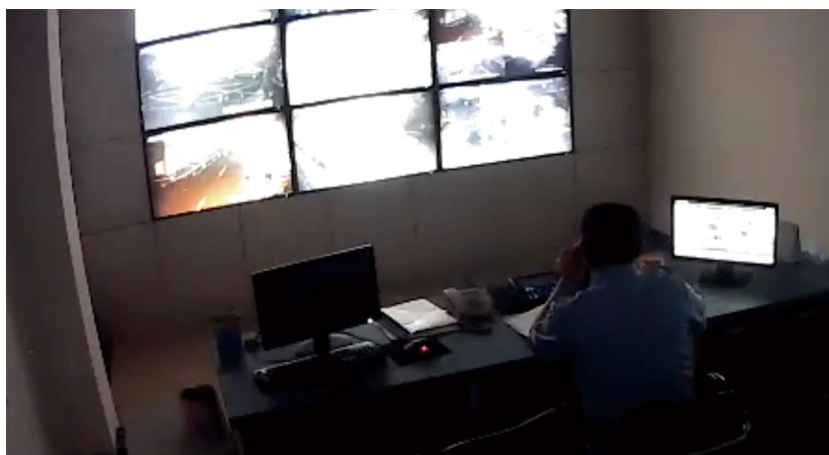
本展では徐の初の映像作品《とんぼの眼》(2017年)を上映する。チンティンという女性と、彼女に片思いする男性、クー・ファンの切ないラブストーリーが語られる。しかし、この映画に役者やカメラマンは存在しない。全ての場面が、ネット上に公開されている監視カメラの映像のつなぎ合わせである。徐と彼の制作チームは、20台のコンピューターを使って約11,000時間分の映像をダウンロードし、若い男女を主人公にした物語に合わせて編集した。

上映時間

10:20-11:41, 13:20-14:41,  
15:20-16:41, 17:20-18:41\*

\*最終回(17:20-18:41)は、金曜日・土曜日の上映です。

上記の時間以外は《とんぼの眼》メイキング映像を上映いたします(約10分)。



徐冰《とんぼの眼》2017年  
ビデオ、ライブ配信サイトで公開されている監視カメラ映像からの抜き出し(81分)

作家蔵

©Xu Bing Studio

Courtesy of the Artist

## “見えない”問題を浮き彫りにするアーティスト

私たちを取り巻く、テクノロジーと権力の相互メカニズムが可視化される

### トレヴァー・パグレン Trevor Paglen

1974年アメリカ、メリーランド州生まれ、ベルリンとニューヨークを拠点に活動。アート・インスティテュート・オブ・シカゴで修士号を、カリフォルニア大学バークレー校で地理学の博士号を取得。近年の主な個展に「Trevor Paglen: Hide the Real. Show the False」(ノイエ・ベルリナー・クンストフェライン、ベルリン、2023年)、「Trevor Paglen: You've Just Been F\*cked by PSYOPS」(ペース・ギャラリー、ニューヨーク、2023年)など。東京電力福島第一原発事故に伴う帰還困難区域内で開催されているプロジェクト「Don't Follow the Wind」(2015年～)に参加している。主な受賞歴にマッカーサー・フェローシップ(2017年)、ナム・ジュン・パイク・アート・センター賞(2018年)など。

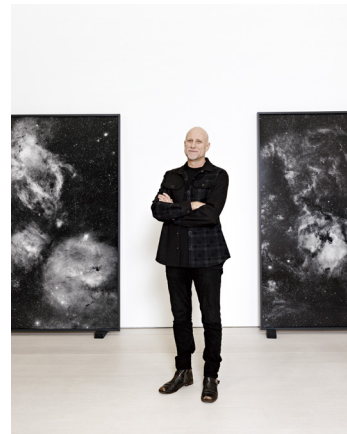


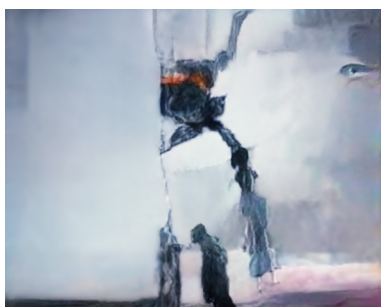
Photo by Axel Dupeux  
Courtesy of the Artist and Pace Gallery

### 〈上陸地点〉、〈海底ケーブル〉、〈幻覚〉

パグレンは地理情報と軍事機密、マシンビジョン、監視と通信システム、AIによる自動生成イメージなどをテーマに、写真、映像、立体作品を制作している。本展では、大陸間を海底でつなぐ通信ケーブルの上陸地点の風景を撮影した〈上陸地点〉シリーズ、海に敷設されているケーブルを撮影した〈海底ケーブル〉シリーズ、パグレンが設計したAIエンジンが生成したイメージによる〈幻覚〉シリーズの3シリーズを展開する。



トレヴァー・パグレン《米国家安全保障局(NSA)が盗聴している光ファイバーケーブルの上陸地点、米国ニューヨーク州マスティックビーチ》2015年  
Cプリント、121.9×152.4cm  
作家蔵  
©Trevor Paglen  
Courtesy of the artist; Altman Siegel, San Francisco; and Pace Gallery, New York



トレヴァー・パグレン《軍人のいない戦争(コーパス:目の機械) 敵対的に進化した幻覚》2017年  
昇華転写印刷、81.3×101.6cm  
作家蔵  
©Trevor Paglen  
Courtesy of the artist; Altman Siegel, San Francisco; and Pace Gallery, New York



出展作家・作品

バレンシアガ

ベランシージ

## ハイブランド **BALENCIAGA** と、労働者のための **BELANCIEGE**

### 現代の政治と社会を「バレンシアガ方式」で読み解く

#### ヒト・シュタイエル Hito Steyerl

1966年ドイツ、ミュンヘン生まれ、ベルリン在住。日本映画大学とミュンヘンテレビ映画大学でドキュメンタリー映画を学び、2003年にウィーン芸術アカデミーで哲学の博士号を取得した。

近年の主な個展に「ヒト・シュタイエル：壊れた窓の街」(ライプツィヒ美術館、2023年)、「ヒト・シュタイエル：データの海」(国立近現代美術館、ソウル、2022年)など。日本では「ハロー・ワールド ポスト・ヒューマン時代に向けて」(2018年、水戸芸術館 現代美術ギャラリー)などのグループ展に参加。2017年に出版された『デュエティー・フリー・アート：課されるものなき芸術 星を覆う内戦時代のアート』は2021年に邦訳版が出版されている(フィルムアート社)。Art Review の「Power100」ランキングでは2013年より現在まで10年連続入選、2017年には1位に選ばれた。

#### 《ミッション完了：ベランシージ》

本展に出品される《ミッション完了：ベランシージ》は、2019年に開催されたシュタイエルの個展においてレクチャー・パフォーマンスとして発表された後、インスタレーションに再構成された。ファッションをキーワードに、1989年のベルリンの壁崩壊からの30年間の、格差という風景を永遠に見せ続ける資本主義の堂々巡りの旅を説く。



ジョルジ・ガゴ・ガゴシツェ、ヒト・シュタイエル、ミロス・トラキロヴィチ《ミッション完了：ベランシージ》2019年  
3チャンネル・HDビデオ(カラー、サウンド)、展示空間(47分23秒)

展示風景「ヒト・シュタイエル」ノイエ・ベルリナー・クンストフェライン(n.b.k.)2019年  
ジョルジ・ガゴ・ガゴシツェ、ヒト・シュタイエル、ミロス・トラキロヴィチの共同制作

作家蔵

Courtesy the artists; Neuer Berliner Kunstverein, Berlin; Andrew Kreps Gallery, New York; Esther Schipper, Berlin

Photo © Neuer Berliner Kunstverein (n.b.k.) / Jens Ziehe



Photo by Leon Kahane

#### ジョルジ・ガゴ・ガゴシツェ

1983年ジョージア、クタイシ生まれ、ベルリンを拠点に活動。トビリシ国立芸術アカデミー(2001–07年)、デン・ハーグ王立美術学院(2008–10年)で学び、ベルリン芸術大学(2012–16年)にてヒト・シュタイエルに師事。「台北ビエンナーレ2023」に出品している。

#### ミロス・トラキロヴィチ

1989年ボスニア・ヘルツェゴビナ、トゥズラ生まれ、ベルリンとアムステルダムを拠点に活動。ウィレム国王学院(2009–12年)で学び、ベルリン芸術大学(2012–16年)にてヒト・シュタイエルに師事。2023年に個展「Colorless Green Feedoms Sleep Furiously」(グラーツ・クンストフェライン、オーストリア)を開催した。

## 「心の恋人」の痕跡を辿りながら、日本社会の深層を浮き彫りにする映像作品 忘れたら、見なかったことになる？

地主麻衣子 Maiko Jinushi

1984年神奈川県生まれ、東京都在住。2010年に多摩美術大学大学院美術研究科を修了。2019年から2020年までヤン・ファン・エイク・アカデミーのレジデンスプログラムに参加。

主な個展に「MAMプロジェクト031：地主麻衣子」（森美術館、2023年）、「親密さと距離」（Centre A、バンクーバー、2023年）、「ブレイン・シンフォニー」（旧横田医院、鳥取、2020年 / Art Center Ongoing、東京、2020年）など。「Women's Lives 女たちは生きている一病い、老い、死、そして再生」（さいたま市プラザノースギャラリー、2023年）や「越後妻有 大地の芸術祭 2022」や「And again {I wait for collision}」（KINGS Artist-Run: Side Gallery、メルボルン、2019年）など国内外の芸術祭やグループ展に参加している。



Photo by marisa shimamoto

### 《遠いデュエット》

地主は映像、インスタレーション、パフォーマンス、テキストなどを総合的に組み合わせて「新しいかたちの文学的な体験」となる作品を制作している。本作品は彼女が自身の「心の恋人」とする詩人・小説家のロベルト・ボラーニョ（1951–2003年）最期の地であるスペインを訪れる旅を題材にしている。現地ですれ違う人々との対話を通して日本の社会を再考する、5章からなる映像作品。



地主麻衣子《遠いデュエット》2016年  
HDビデオ(40分)  
作家蔵  
©Maiko Jinushi  
Courtesy of HAGIWARA PROJECTS

出展作家・作品

孤独死の現場から私たちに問いかける  
社会保障が充実していれば、幸せになれるのか？

ティナ・エングホフ Tina Enghoff

1957年デンマーク生まれ、コペンハーゲン在住。ニューヨークのインターナショナル・センター・オブ・フォトグラフィー (ICP) で写真を学ぶ。本展に出品される〈心当たりあるご親族へ〉プロジェクトは2003年の個展(ニコライ・クンストハル、コペンハーゲン)にて発表された。その他近年の主な個展に「Displaced」(デンマーク王立図書館 ブラック・ダイヤモンド、コペンハーゲン、2022年/シシミュウ美術館、グリーンランド、2021年)、「移住者の記録」(フォトグラフィスク・センター、コペンハーゲン、2013年/ Gallery Tegen2、ストックホルム、2013年)など。スウェーデンのArbetets Museumが主催するドキュメンタリー写真賞を2018年に受賞した。



Photo by Kent Klich

〈心当たりあるご親族へ〉

日本初出品の作家。エングホフは記録写真における表象と可視性の問題を扱う作品を制作している。主に北欧における植民地主義や福祉国家の制度的暴力、アーカイブの権力構造といったテーマに関心を持ち、コミュニティへの参加や共同制作、アート・アクティヴィズムを中心としたプロジェクトを実践する。〈心当たりあるご親族へ〉は孤独死した人の身元引受人を探すための新聞記事に着想を得ており、都市に存在する孤独を問う。



ティナ・エングホフ《心当たりあるご親族へ—男性、1954年生まれ、自宅にて死去、2003年2月14日発見》2004年  
アーカイバルピグメントプリント、120×160×5cm  
作家蔵  
©Tina Enghoff  
Courtesy of the Artist

## 世界中をつなぐ通信のケーブルを地道につなぐ作業員の“手” 小さな個人の手仕事から、大きな世界を見通す

チャ・ジェミン Jeamin Cha

1986年韓国生まれ、ソウル在住。2010年に韓国芸術総合学校美術学部を卒業後、2011年にロンドンのチェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザインで修士号を取得。

近年の主な個展に「Troubleshooting Mind I, II, III」(Kadist、サンフランシスコ、2020年)、「Love Bomb」(サムユク・ビルディング、ソウル、2018年)など。「第14回光州ビエンナーレ」(2023年)などの芸術祭のほか映画祭にも参加しており、第69回オーバーハウゼン国際短編映画祭(ドイツ、2023年)では審査員特別賞を、第47回DMZ国際ドキュメンタリー映画祭(韓国、2022年)では特別賞を受賞した。



Photo by Jungwoo Park

### 《迷宮とクロマキー》

日本初出品の作家。映像、パフォーマンス、インスタレーションと執筆活動まで、多岐にわたる媒体で制作を続けている。チャの作品は、身体と心理や感情との関係性を扱い、表現しがたい経験を持つ個人に焦点を当てる。また、技術の進歩によって縮小していく未知の領域を保存することに関心を持っている。映像作品《迷宮とクロマキー》では、「ネット強国」を自負する韓国社会の片隅で、「配線」という目に見えないインフラを作る作業員の姿から、大量の情報を支える個人の労働が浮かび上がる。



チャ・ジェミン《迷宮とクロマキー》2013年  
シングルチャンネル・HDビデオ(カラー、サウンド、15分)  
作家蔵  
©Jeamin Cha  
Courtesy of the Artist

出展作家・作品

アートをハッキングするアーティスト

無作為に並べられた大量の画像があらわす現代の肖像画

エヴァン・ロス Evan Roth

1978年アメリカ・ミシガン州生まれ、ベルリンを拠点に活動。メリーランド大学で建築学を学び、パーソンズ・スクール・オブ・デザインでデザイン&テクノロジーを専攻しMFAを取得。本展に出品される《あなたが生まれてから》はジュ・ド・ポーム国立美術館(パリ、2020年)やMOCA ジャクソンヴィル(フロリダ、2019年)においても披露された。その他近年の主な個展に「Skyscapes: Berlin-Mitte」(rosa、ベルリン、2023年)、「Red Lines with Landscapes: Portugal」(フィデリダデ・アルテ、リスボン、2020年)など。目の動きだけで絵が描ける装置《The EyeWriter》の開発プロジェクトに携わり、第14回文化庁メディア芸術祭(2010年)で優秀賞を獲得した。



《あなたが生まれてから》

ロスは私たちを取り巻く環境を完全に作り変える力をもつ点に芸術作品の制作とハッキングの相似性を指摘し、絵画や彫刻、ウェブサイトまで多様なメディアに応用する。《あなたが生まれてから》は彼が2021年から取り組んできた〈インターネット・キャッシュ自画像〉シリーズのうちの一つで、自身のコンピューターのキャッシュ(cache)に蓄積される画像データを抽出して空間を飽和させるインスタレーション。本作では、彼に次女が誕生した日以降にキャッシュされた画像を用いて没入的な空間を作り出す。



エヴァン・ロス《あなたが生まれてから》2023年  
壁紙、サイズ可変  
作家蔵

©Evan Roth  
展示風景:「あなたが生まれてから」ジャクソンビル現代美術館 2019年  
Courtesy of the MOCA Jacksonville  
Photo by Doug Eng

## 変わる世界と変わらない風景

あなたの日常はどこにありますか？

木浦奈津子 Natsuko Kiura

1985年鹿児島県生まれ、鹿児島県在住。2010年に尾道市立大学大学院美術研究科油画専攻を修了。

近年の主な個展に「目の前をよぎる」(Takashi Somemiya Gallery、東京、2022年)、「表面をなぞる」(EUREKA、福岡、2022年)など。2019年に第45回鹿児島市春の新人賞を受賞し、受賞記念展として「うみとこうえんと、」(鹿児島市立美術館、2021年)が開催された。このほか「VOCA展2022

現代美術の展望—新しい平面の作家たち—」(上野の森美術館、2022年)などのグループ展に参加している。



Photo by リアライズ

### 《こうえん》

木浦は一貫して風景、特に日常の景色の油絵を描き続けている。カメラで捉えた近郊の風景をもとに描かれる彼女の作品は、単純で抽象的でありながらも、見たときの風景そのままを保存する不思議な魅力をもつ。《うみ》《こうえん》《やま》など身近な風景を通じて、私たちの生活の変わらない本質を捉える。会場では、新作を交えて大小さまざまな風景を、木浦自身がインスタレーションのように壁面いっぱいに展示する。



木浦奈津子《こうえん》2021年  
油彩／キャンバス、97×145.5cm

作家蔵

©Natsuko Kiura

Courtesy of the Artist

Photo © EUREKA

## 関連イベント

### アーティスト・リレー・トーク

井田大介、地主麻衣子、ティナ・エングホフ、チャ・ジェミン、エヴァン・ロス

日程 3月10日(日)13:00-16:30

会場 国立新美術館 3F 講堂

参加費 無料

参加方法 当日10:00より中央インフォメーション(1階)にて整理券を配布いたします。

※日本語と英語の同時通訳をご利用いただけます。

---

### 講演会

徐冰(シュ・ビン)

日程 3月17日(日)

会場 国立新美術館 3F 講堂

参加費 無料

参加方法 オンラインによる事前申し込み制

※日本語と中国語の同時通訳をご利用いただけます。

---

### アーティスト・ワークショップ

木浦奈津子

日程 5月12日(日)

会場 国立新美術館

参加方法 オンラインによる事前申し込み制

---

### 対談

ヒト・シュタイエル×トレヴァー・パグレン

日程 5月25日(土)

会場 国立新美術館 3F 講堂

参加方法 オンラインによる事前申し込み制

※日本語と英語の同時通訳をご利用いただけます。

---

### ギャラリートーク

尹志慧(国立新美術館 特定研究員/本展企画者)

日程 会期中複数回の実施を予定しています。

会場 国立新美術館 企画展示室1E

参加費 無料

※詳細は後日美術館のHPでお知らせします。

## 展覧会カタログ

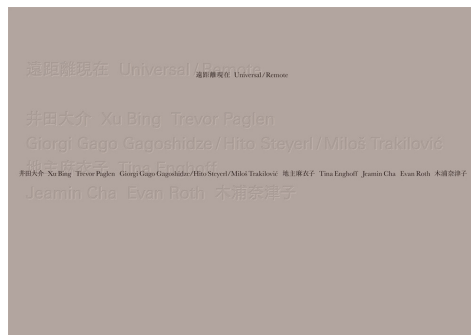
展覧会カタログには小説家・福永信が書き下ろし掌篇9点を寄せたほか、ブックデザインを村尾雄太が手がけました。

### 福永信 Shin Fukunaga

小説家。1972年生まれ。著書に『星座から見た地球』、『—————』、『実在の娘達』など。編著として『こんにちは美術』、『小説の家』などがある。

### 村尾雄太 Yuta Murao

グラフィック・デザイナー。1990年生まれ。アート、ファッション、音楽などの領域に関わるグラフィックデザインやブックデザイン、ウェブデザインのプロジェクトに携わる一方、2017年よりデザインスタジオwellのメンバーとしても活動を行う。



サイズ：25.7cm×18.2cm(B5判)

ページ数：141ページ

言語：日英バイリンガル

価格：1,500円(税込)

発行日：2023年10月6日

デザイン：村尾雄太

編集：浅見旬、尹志慧

発行：国立新美術館

ISBN：978-4-910253-10-7



## 開催概要

タイトル[日]: 遠距離現在 Universal / Remote  
タイトル[英]: Universal / Remote  
会期: 2024年3月6日(水) – 6月3日(月)  
休館日: 毎週火曜日 ※ただし4月30日(火)は開館  
開館時間: 10:00–18:00 ※毎週金・土曜日は20:00まで ※入場は閉館の30分前まで  
会場: 国立新美術館 企画展示室1E  
(〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2 ※美術館に駐車場はございません)  
観覧料: 一般1,500円 大学生1,000円  
※高校生、18歳未満の方(学生証または年齢のわかるものが必要)は入場無料。  
※障害者手帳をご持参の方(付添の方1名含む)は入場無料。  
チケット情報は、国立新美術館ホームページをご覧ください。  
主催: 国立新美術館  
協力: ゲーテ・インスティトゥート東京  
企画: 尹志慧(国立新美術館 特定研究員)  
一般のお問い合わせ: 050-5541-8600(ハローダイヤル)  
国立新美術館ホームページ: <https://www.nact.jp>  
巡回: 広島市現代美術館 [会期: 2024年6月29日(土) – 9月1日(日)]

## 国立新美術館 について

東京・六本木にある国立新美術館は、国内最大級の展示スペースを生かした多彩な展覧会の開催や、美術に関する情報や資料の収集・公開・提供、さまざまな教育普及プログラムの実施に取り組んでいます。

芸術を介した相互理解と共生の視点に立った新しい文化の創造に寄与することを使命に、2007年、独立行政法人国立美術館に属する5番目の施設として開館しました。コレクションを持たない代わりに、人々がさまざまな芸術表現を体験し、学び、多様な価値観を認め合うことができるアートセンターとして活動しています。

## 広報用画像

広報用画像をご提供いたします。  
最新の広報用画像は、こちらのURLより申請、ダウンロードいただけます。  
<https://www.artpr.jp/nact/universalremote2024>

---

報道関係のお問い合わせ先 国立新美術館「遠距離現在 Universal / Remote」  
広報事務局(株式会社ユース・プランニング センター内)  
E-mail: [ur2024@ypcpr.com](mailto:ur2024@ypcpr.com)